

令和 3 年 6 月 15 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02270

研究課題名(和文) ジョン・デューイの「教育の公共性」に関する教育政治学的研究

研究課題名(英文) A theoretical study of John Dewey's view of 'the public nature of education'

研究代表者

石田 雅樹 (ISHIDA, Masaki)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10626914

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、「教育の公共性」とは何かという問題に対して、アメリカの哲学者ジョン・デューイ(John Dewey)の思想を通じて明らかにすることにある。本研究では、デューイの思想を「教育の公共性」から読み解くことで、「市民性教育」と「職業教育」との相補性について、「よき市民であること」の内実について、「市民性教育」と「国民性教育」との相違点について明らかにした。本研究は「教育の公共性」というテーマを設定することで、政治学と教育学を横断するデューイの思想的独自性とその現代的意義を明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の第一の意義は、「教育の公共性」という抽象的な問題について、「制度」(学校、試験、カリキュラムなど)と「思想」(リベラリズム、平等、効率性など)双方からアプローチを行うことで、教育に求められる公共性の在り方について、具体的な問題提起を行った点にある。第二の意義は、「教育の公共性」からデューイを読みとくことで、同時代の教育・政治を取り巻く状況におけるデューイの思想的意義と限界を明らかにしたことにある。具体的には、「市民性教育」と「職業教育」の関係性や、「良き市民であること」の意味、また「市民性教育」と「国民性教育」との異同について問い直す作業を通じてデューイの現代性を浮かび上がらせた。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this research project was to clarify the meaning of the "public nature of education" by applying the theoretical perspective of the American philosopher John Dewey. Using Dewey's theory to reinterpret "the public nature of education," it elucidates (1) the complementarity between "citizenship education" and "vocational education," (2) the essence of "good citizenship," and (3) the differences between "citizenship education" and "national education." Focusing on the theme of "the public nature of education" enables this study to make explicit Dewey's ideological uniqueness and contemporary significance, which transcend political science and pedagogy.

研究分野： 教育政治学 政治思想史 教育思想史

キーワード： ジョン・デューイ 教育の公共性 市民性教育 職業教育 進歩主義教育 ナショナリズム デモクラシー ウォルター・リップマン

1. 研究開始当初の背景

「教育の公共性」とは何かについて、教育格差の拡大や18歳選挙権実施に伴う主権者教育への注目など理論的関心は高まっているが、それに応えるような研究が十分に行われていないという状況認識が本研究の発端にある。この「教育の公共性」の問題は、政治学と教育学双方を横断するものであるが、政治学では「公共性」研究の蓄積こそあるものの、それを学校教育の文脈で問い直す作業は手薄であり、他方で教育学では政治学での研究成果を考慮せずに、「官僚制」「市場化」「ナショナリズム」批判として安易に「公共性」を論ずる傾向が見受けられる。本研究はこうした状況を鑑みて、「教育の公共性」を政治学と教育学を横断する視点から捉え直すため、ジョン・デューイを対象として取り上げ、その思想的独自性と現代的意義を考察する作業を行った。

デューイについては、既に多くの研究が行われているが、従来の研究では教育学、とりわけ教育思想においてその教育的貢献への評価を肯定的に論じるものが多数であり、「教育学」と「政治学」とを横断し、「制度」と「思想」双方の視点から総合的に考察する試みは行われてこなかった。また、従来の研究ではデューイ思想の内在的理解に注目しがちで「なぜデューイが重要か」という問い自体が不在であり、他の教育学者や政治理論家との比較からその独自性を明らかにしようとする試みも希薄であった。本研究はこうした先行研究を批判的に踏まえた上で、「教育の公共性」という論点からデューイ研究を行った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「教育の公共性」という視点から、デューイのテキストを読み解き、当時の教育政策や学校教育における歴史的位置付けと現代的意義を明らかにすることにある。本研究を通じて、デューイにおいて「制度」の問題（学校、教育評価、カリキュラムなど）と、「思想」の問題（公平と正義、自由と平等、効率性など）がどのような関係にあったのかを検証し、その「教育の公共性」の可能性と限界を提示した。

研究に際して本研究が重視したのは、(1)批判的解釈アプローチと、(2)比較思想アプローチである。

(1)これまでのデューイ研究はしばしば、デューイのテキストの内在的理解を重視するあまり、それが当時のアメリカ教育制度や社会制度においてどのような意義と限界を有していたかを批判的に問う姿勢が希薄であった。本研究はデューイを当時の政治・社会的文脈に照らし合わせ批判的に吟味した上で、評価すべき点と批判すべき点とを区分することで、その可能性と限界を見定める試みを行った。具体的には、デューイの教育思想が、当時の学校教育・教育行政・カリキュラムとどのような位置にあったかを当時の論争などを元に検証した。また当時のアメリカの第一次大戦参戦に際して、教育によるナショナルな統合が求められる中で、デューイにおいてナショナリズムと教育はどのような関係にあったかを批判的に問い直す作業を行った。

(2)上記とも関係するが、これまでのデューイ研究はその内在的理解を強調するあまり、同時代の論争相手との応答を十分に吟味し、理論的比較を行った上で公平な評価を行うという姿勢が弱い。例えば『世論』(1922)や『幻の公衆』(1925)を記したW.リップマンに対して、デューイは『公衆とその諸問題』(1927)を記して応答を行ったが(リップマン=デューイ論争)、多くの研究でリップマンはデューイの「引き立て役」として扱われる傾向が強く、公衆をめぐる教育の可能性について両者が何を問題としその相違が何かを真摯に考察する試みはほとんど行われてこなかった。本研究はそうした点を踏まえ、W.リップマン、C.E.メリアム、G.S.カウツ等の思想家との比較から、デューイの理論的独自性を明らかにした。

3. 研究の方法

上記の目的に従って、本研究はデューイの「教育の公共性」を解き明かすために、(1)大衆社会における公衆とその教育、(2)「シティズンシップ(市民性)教育」と「職業教育」論、(3)進歩主義教育にける教育評価(教育測定)という三つの論点を設定した。それぞれのテーマの研究期間を原則1年とし、合計3年間の取り組みによって研究目標の達成を行った。

(1)大衆社会における公衆とその教育

デューイが当時のアメリカ大衆社会において「公共性」をどう位置づけたかについては、『公衆とその諸問題』(1927)において示されているが、同書がW.リップマン『世論』(1922)を強く意識したものであることはよく知られている。同書において、デューイは能動的な市民としての「公衆」publicの可能性を提示したが、それはリップマンの問題提起に応じて、世論と専門知との関係を問い直すものであった。この両者の関係性と比較については既に取り組んだ業績があるが本研究はそれをさらに深めて、両者における専門知の在り方やメディア論の比較(表現の自由と検閲の問題等)を通じて、デューイの「公衆」論を考究した。

(2)「シティズンシップ(市民性)教育」と「職業教育論」

上記(1)の能動的な市民としての「公衆」を育成するために、デューイがどのような「シティズンシップ(市民性)教育」を構想したのかは、重要な論点であるにもかかわらず、これまで十分な研究が行われてこなかった。本研究では『明日の学校』(1915)などで展開される「職業教育」論に注目し、それが「仕事」Occupation 概念を展開させるものとして、独自の「シティズンシップ教育」でもあることを示した。この際、同時代の政治学者 C.E. メリアムが論じた政治教育論(C.E.Merriam, *Civic education in the United States*, 1934)との比較を通じて、その構想の独自性を示し、それが今日における「シティズンシップ教育」のより深い実践につながるものであることを明らかにした。

(3)進歩主義教育における教育評価(教育測定)

デューイは、学校という制度における教育評価(テスト等)をどのように考え、それがどのような思想に基づいているかという問題も、重要な論点となる。当時「進歩主義教育」の中で新たな教育ツールとして導入された知能テストや、それと連動して「客観的な」教育評価を目指す運動(E.L.ソーンダイクの教育測定運動など)は、教育効果・評価を「客観的に」測定し公開することで、新たな「教育の公共性」を提示したが、これにデューイはどのように応答したのか。それが当時の「社会改造主義」という思想とどう関係していたのかについて考究することを通じて、「教育の公共性」の在り方を示そうとした。

4. 研究成果

研究実績としては、研究論文4本、書籍2本、学会報告3本という研究成果を挙げた。本研究を通じて明らかになった論点は主として以下の3点である。

(1)「公衆」の政治教育の可能について

初年度研究テーマとした「大衆社会における公衆とその教育」においてJ・デューイとW・リップマンとの政治教育論に取り組んだ。両者の関係については、従来「エリート論者=リップマン」対「民主主義者=デューイ」という対立によって論じられてきたが、本研究を通じてそうした対比が妥当ではなく、むしろある時期には両者の共通性が顕著になることを示した。またそうした共通性を踏まえた上で、真の対立点が「市民性教育」と「職業教育」との連関にあること、つまり両者の連携を重視するデューイに対して、両者を峻別するのがリップマンであることを論証した。

(2)「良き市民であること」と「効率性・有能さ」との関係について

デューイの「市民性教育」論について、「良き市民であること」good citizenshipの「良さ」について、デューイがefficiency(効率性・有能さ)という言葉で論じている点に注目し、その意義を明らかにした。デューイはefficiencyという言葉によって、当時進展しつつあった進歩主義教育における「社会的効率性」の在り方、とりわけ早期に職業教育と一般教育を峻別する教育政策の在り方を批判したが、その批判の重要性を再確認した。またそれと同時に、それと異なるefficiencyの可能性を、他者とのコミュニケーションを促す資質・能力の重要性として位置付けた点に注目し、efficiencyがデモクラシーを支える技能として「市民性教育」と深く関わるものであることを示した。

(3)「市民性教育」と「国民性教育」との関係について

デューイの市民性教育論がナショナリズムとどのような関係にあるか、とりわけ第一次大戦でのアメリカ・ナショナリズムの高揚という文脈での位置を検証した。デューイがアメリカの第一次世界大戦参戦に賛同したことはよく知られているが、その際のアメリカ・ナショナリズムの位置付けと、教育との関わりについてはこれまで十分な研究が行われてこなかった。本研究では、デューイにおけるナショナリズムについて、デモクラシーとアメリカとを同一視しドイツとの異質性を強調する議論や、学校教育を通じたナショナルな統合の重要性に着目した。それによって、デューイにおける「市民性教育」と「国民性教育」の共通点・相違点を明らかにした。

研究成果として評価すべき点は、当初の研究計画よりも、デューイ「市民性教育」論の射程の広さと意義を解き明かすことができた点である。(2)のgood citizenshipとefficiencyとの関係について、(3)デューイのナショナリズムについては、当初の研究計画では副次的論点であったものの、研究を深めることで重要な論点として提示することができた。他方で、当初予定していた進歩主義教育における教育評価(教育測定)については、進歩主義教育におけるデューイの位置を検証する段階に留まり、その教育評価までは十分な研究成果を挙げることができなかった。この点については今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 石田雅樹	4. 巻 54
2. 論文標題 「良き市民であること」good citizenship の「良さ」とは何か ジョン・デューイ「社会における有能さ」social efficiency について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 宮城教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 37-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石田雅樹	4. 巻 53
2. 論文標題 「政治の科学」と「政治教育」のあいだ チャールズ・E・メリアムの「市民教育」論について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『宮城教育大学紀要』	6. 最初と最後の頁 95-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石田雅樹	4. 巻 2020(2)
2. 論文標題 「市民性」を陶冶する教育、「国民性」を育む教育：ジョン・デューイにおけるナショナリズムと教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『年報政治学』	6. 最初と最後の頁 237-255
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 石田雅樹	4. 巻 55
2. 論文標題 ジョン・デューイにおける「デモクラシー」と「効率性」 進歩主義教育、職業教育、ゲーリー・プラン	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『宮城教育大学紀要』	6. 最初と最後の頁 45-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 石田雅樹
2. 発表標題 「良き市民であること」good citizenship とはどのようなことか? ジョン・デューイ「市民性教育」論再考」
3. 学会等名 日本政治法律学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石田雅樹
2. 発表標題 「公衆」の政治教育の可能性について 「リップマン - デューイ論争」再考
3. 学会等名 日本政治学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石田雅樹
2. 発表標題 「ジョン・デューイにおける「民主主義と教育」の変貌：市民性教育、社会改造主義、ソビエト・ロシア」
3. 学会等名 社会思想史学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 関口正司, 施光恒, 蓮見二郎, 石田雅樹, 竹島博之, 井柳美紀, 平石耕, 鍋木政彦	4. 発行年 2019年
2. 出版社 風行社	5. 総ページ数 288
3. 書名 『政治リテラシーを考える 市民教育の政治思想』（第4章「リップマン - デューイ論争」再考 「公衆」の政治教育をめぐる対話について）	

1. 著者名 三浦 隆宏、木村 史人、渡名喜 庸哲、百木 漠、石田雅樹（他）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 430
3. 書名 『アーレント読本』（「革命・権力・暴力 自由と合致する権力、自由のための革命」pp.95-102）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------